

# 自閉スペクトラム症傾向の高い大学生の 生得的要因に及ぼす環境効果の検討

土田弥生 (田園調布学園大学)

キーワード: エゴ・レジリエンス, ハーディネス, コントロール

## 問題と目的

日々のストレスや直面する困難な状況乗り越えることの出来る力であるレジリエンスの過程で関与し、レジリエンスの一部として位置づけられている生得的な力にエゴ・レジリエンス(ego-resiliency:ER)がある(Luthar, S., Cicchetti, D., & Becker, B., 2000)。土田(2019)は、ASD傾向の高いアスリート大学生と非アスリート大学生の比較調査により ASD傾向の高いアスリート大学生のERが有意に高いことを明らかにしている。一方、日々のストレスに対処する性格特性としてハーディネスがある。ハーディネスは「高ストレス下において健康を保つ人々が保持する性格特性」であり(Kobasa, 1979)、内発的動機づけを高める自律性に関与する特性でもある。このハーディネスを高く保つことが出来れば適応力も高まると考えられる。特にASD傾向の高い子どもたちが、環境適応力を身に付けることは喫緊の課題である。そこで、ASD傾向の高いアスリート大学生と非アスリート大学生のハーディネスについて比較検討し、その結果から効果的な心理的支援について考察することを目的とする。

## 調査時期および調査協力者

2015年6月上旬から7月上旬にかけて関東地方および関西地方の大学のアスリート大学生118名、平均年齢は19.46歳( $SD=1.018$ )、男子81名、女子37名、非アスリート大学生189名、平均年齢は19.04歳( $SD=1.184$ )、男子95名、女子94名の合計307名を対象に調査を行った。

## 調査の手続き

調査協力者となる大学生の講義終了と同時に質問紙を配布、無記名、自記式にて実施、その場で回収した。倫理的配慮として、質問紙配布の際、研究参加は自由意思による同意に基づき、質問紙への回答をもって調査参加への同意意思があると判断する、個人の特定が出来る形で内容を公表しない旨を伝え、同内容をフェー

スシートにも明記した(吉備国際大学大学院心理学研究科倫理審査委員会承認番号:15-21)。

## 調査内容

**デモグラフィックデータ** 年齢, 性別。

**自閉性スペクトル指数 (Autism-spectrum Quotient : AQ)** 10項目版 (AQ-J-10 26) Kurita, H., Koyam, T., & Osada, H. (2005) (4件法10項目)

**Ego - Resiliency (ER89)** (畑・小野寺, 2013) (4件法14項目)

**大学生用ハーディネス尺度** 多田・濱野(2003) (4件法15項目)

## 分析方法

調査データの分析に当たっては、統計ソフトSPSS. ver25を使用した。

## 結果と考察

ハーディネスを構成する3因子(チャレンジ, コントロール, コミットメント)におけるアスリート大学生と非アスリート大学生全体の $t$ 検定の結果は、アスリート大学生のコントロールが有意に高かった( $t(34) = -4.49, p < .001$ )。チャレンジとコミットメントに有意な差はなかった。AQ-J-10の指標を基にASD傾向低・中・高の3群に分け検討した結果は、3群すべてにおいてアスリート大学生のコントロールが有意に高く、チャレンジとコミットメントに有意な差は見られなかった。分析の結果と、性格特性が遺伝的要因と環境要因との相互作用により形成されることに鑑み、自己調整に関与するコントロールの力は、アスリート大学生という環境の中で、明確な達成目標を持ち、その目標を達成するために日々欠かさず努力することによる効果と考えられERも同様と推測される。したがって、ASD傾向の高い子どもたちの支援の一助として、運動の苦手な子も楽しめる運動の継続と、その時々における明確な目標を持ち、その目標の達成のために努力を惜しまない結果として、自分が向上できると実感出来るような環境作りが必要であると考えられる。